第２部
沖縄海洋博の内在的分析

第３章　＜海＞をめぐるイメージ・ポリティックス

第１節　政治的祝祭としての沖縄海洋博

（1）万国博覧会の歴史のなかの沖縄海洋博：実質性と祝祭性

沖縄国際海洋博覧会は、1975（昭和 50）年 7 月 20 日～76 年 1 月 18 日の 6 ヶ月、183 日間にわたり、沖縄本島北部・本部半島の会場において開催された。国際博覧会事務局（BIE）の承認に基づいて行われた、正式な万国博覧会である。5 年前の 1970 年に大阪で開催された日本万国博覧会が「一般博」であったのに対して、沖縄海洋博は「海」という特定のテーマに限定された「特別博」であった。世界から 35 カ国、3 国際機関、1 自治領が参加し、特別博としては史上最大の外国出展参加数となった。ただし観客動員数は、地理的条件やオイルショックによる会期の変更などもあり、当初見込まれた 450 万人を下回る 348 万人にとどまった。

ところで、万国博覧会は、複数の国が出展に参加する国際的なイベントである。世界初の万国博覧会は 1851 年イギリスのロンドン万博で、それまでの工業製品・工芸品の展覧会を、国際的な規模に拡大したものであった。その成功以来、各国が後を追って次々に開催することになる。代表的な万博としては、1855 年以来繰り返し開かれたパリ万博、73 年のウィーン万博、76 年のフィラデルフィア万博、93 年と 1933 年のシカゴ万博、1904 年のセントルイス万博、39 年のニューヨーク万博と 64 年の同世界博、70 年の大阪万博などが挙げられる。これらはいずれも、数百万～数千万人の観客を動員した大規模なイベントであった。その最たるものが 70 年の大阪万博で、観客数は 6420 万人にまで及んだ。

重要な基本前提は、これらの万博開催の実質的な主導権を握っていたのが大部分、各国家の政府だったことである。すなわち万博とは、国家が国策として巨額の予算を投じて行う、高度な政治性をひめたプロジェクトなのである。それでは、万博は一体、なぜそこまで重視され、何のために行われてきたのだろうか。

博覧会の効果は、＜実質性／祝祭性＞という観点から、大きく二つに分けることができる。まず一つは経済成長の実質的な効果、いわゆる産業振興である。初期、特に 19 世紀の万博では、様々な新しい技術や物産を展示して、国民を「生産者」「消費者」として視覚的に教化し、技術の普及・発展を促進していくことが図られた。「産業社会の学校」としての博覧会である。

とはいえ、回を重ねるごとにこうした国民教化の意味合いは弱まり、20 世紀には万博は娯楽化傾向を強めていく。むしろ全体的には、大量の観光客動員による経済効果の方が大きいといえよう。すでに 1851 年の時点で、ロンドン万博をきっかけに、トーマス・クックによる鉄道団体旅行の産業化が推し進められていたのである。それと同時に、大規模な博覧会関連の公共事業が見込めることは大きい。広大な会場の建設に加えて、会場周辺の道路・鉄道・上下水道・エネルギーなどの都市基盤（インフラ）整備、会場の跡地利用などをセットにした、大型プロジェクトが立ち上がりうる。19 世紀後半、オスマンのパリ改造事業は、約 11 年ごとに繰り返された数回のパリ万博を起爆剤として、成し遂げられたのである。雇用創出や都市開発などを含めた経済成長を一挙に実現しようとするのが、万博の実質的効果である。

ところで、博覧会の基本的特徴は、多数の観客にひろく展示を見せるという点にある。すなわち、視覚性を前提にしている。万博において、国民教化や観光客動員による産業振興は、「観客が展示を見る・見に来る」という視覚性を媒介して、初めて成立しうるのである。しかし、博覧会の視覚性において重要なのは、こうした実質的な経済効果だけではない。沖縄海洋博を含めて、博覧会の政治経済学的分析の多くは、博覧会のこうした実質的な経済効果にのみ関心を向けることで、とどまってしまう傾向がある。

視覚性とも関連して、もう一つの重要な博覧会の効果は、祝祭的な効果である。博覧会はオリンピックとともに、近代社会が産み出した巨大な祝祭的イベントでもある。これはスペクタクル的な視覚性を前提にしており、先の経済的な実質性への直接的なリンクの次元とは、一応区別して考えることができる。では、万博の祝祭性は、何のためにあるのだろうか。

万博は各国家の記念イベントとして、国家的アイデンティティを表現するために開催されてきたものが多い。表１に示すように第二次大戦期まで、万博の祝祭的意義は国威発揚・ナショナリズムの高揚と密接に結びついてきた。展示内容も、帝国主義を称揚した植民地主義的な展示を多数行っていた。[1]しかし戦後は冷戦体制の中にあって、ナショナリズムや植民地主義も色を薄めていく。

表１　代表的な万博の祝祭的意義・モニュメント的建築・スペクタクル装置

年	開催地	祝祭的意義	ﾓﾆｭﾒﾝﾄ的建築	ｽﾍﾟｸﾀｸﾙ装置
1851	ﾛﾝﾄﾞﾝ	万国の産業の成果	水晶宮	透明ｶﾞﾗｽ建築
1876	ﾌｨﾗﾃﾞﾙﾌｨｱ	ｱﾒﾘｶ独立 100 年		
1889	ﾊﾟﾘ	ﾌﾗﾝｽ革命 100 年	ｴｯﾌｪﾙ塔	世界を俯瞰
1893	ｼｶｺﾞ	新大陸発見 400 年	ﾎﾜｲﾄ･ｼﾃｨ	観覧車
1900	ﾊﾟﾘ		ｴｯﾌｪﾙ塔（照明）	光の演出、夜景
1904	ｾﾝﾄﾙｲｽ	ﾙｲｼﾞｱﾅ買収 100 年		「人間の展示」
1939	ﾆｭｰﾖｰｸ	明日の世界	ﾄﾗｲﾛﾝとﾍﾟﾘｽﾌｪｱ	三角の塔と球形
1970	大阪	成長の持続と調和	太陽の塔	
1975	沖縄	日本復帰／海洋	ｱｸｱﾎﾟﾘｽ、沖縄館	

特にこの転換の契機となったのは、1939～40 年のニューヨーク万博である。これを境に、「国家」と「生産」の博覧会は「企業」と「消費」の博覧会へ変容し、[2]企業のコマーシャリズムが前面に出てくる。博覧会はむしろ、巨大な広告空間として、大衆的消費の「お祭り」的な性質を強めていくのである[3]。70 年の大阪万博も、この流れの中にあった。

もっとも、こうした変容の潮流とは別に、ナショナリズムと直接的には結びつかないような万博の祝祭的側面は、最初からあった。新しいテクノロジーを活用したスペクタクル的な演出は、観客を視覚的に圧倒し、魅了することによって非日常的な空間感覚を喚起し、万博を祝祭化していく効果をもっていたのである。いくつか代表例を挙げれば、1851 年ロンドン万博の主会場・水晶宮は透明なガラス建築で、自然の太陽光を照明として取り込む

[1] 例えば 1904 年のセントルイス万博では、植民地集落を再現して、大規模な「人間の展示」が行われるまでに至った。
[2] 吉見、1992、p.243。
[3] しかもこの流れは、ディズニーランドやユニバーサルスタジオをはじめとするテーマパークへと受け継がれ、日常化されていく。

ことによって、均質的な明るさの展示空間を体現したし、89 年パリ万博のエッフェル塔は、世界を高みから俯瞰するまなざしを実現した。93 年のシカゴ万博では観覧車が初登場し、1900 年パリ万博では電気照明がふんだんに活用され、光り輝く夜景が演出された。万博で採用されたこれらの新しいテクノロジーはいずれも、後に日常生活や経済活動の中に環境として取り込まれ、使われていくことになるものばかりである。万博は、近未来に使われそうなテクノロジーを先取りして活用し、視覚的なスペクタクル効果を施すことによって、観客に対して＜未来＞イメージを祝祭的に演出するのである。

ところで、博覧会の祝祭性を物質的に具現化し、象徴的に視覚化するシンボル的存在は、モニュメンタルな建築物である。ロンドン万博では水晶宮、パリ万博ではエッフェル塔、そして大阪万博では岡本太郎による太陽の塔であった。これが沖縄海洋博ではアクアポリス、そして沖縄館に受け継がれていくわけである。

以上、＜実質性／祝祭性＞という観点から、万博の歴史を概観してきた。さらに、高度成長期からの日本に焦点を当てて考えを進めておくなら、1962 年の全国総合開発計画以来、万博をはじめオリンピック、地方博覧会、テーマパークなどのイベント文化とそれに伴う地域開発において、祝祭性は即、実質性と結び付けて構想されてきた。64 年の東京オリンピックを皮切りに、70 年の大阪万博、72 年の札幌オリンピック、75 年の沖縄海洋博、81 年の神戸ポートピア博、83 年の東京ディズニーランド、85 年のつくば科学博、これらに影響を受けた 80 年代末からの地方博覧会ブームとテーマパーク建設ブーム、90 年の大阪花と緑の博覧会、98 年の長野オリンピック、2001 年大阪のユニバーサルスタジオジャパンと東京ディズニーシー、2002 年のサッカーワールドカップに至るまで、これらのビジュアル・イベントの数々は、多数の日本国民を非日常的なカーニバルへと動員する、祝祭的な効果を発揮してきた。そしてやはり東京オリンピックの成功以来、その祝祭性と密接に連動させる形で、高速道路や新幹線をはじめとするインフラ整備や、産業振興による地域活性化・雇用創出といった経済的実質性の効果が、図られていくのである。特定の巨大イベントを立ち上げ、そのイベント関連で公共事業や民間投資を集中させていく、開発のエピステーメーが誕生し、連鎖反応的に今日まで繰り返されてきたわけである。

1975 年の沖縄海洋博は、以上のような世界の万博の歴史と、日本国内のイベント文化の歴史が交錯する地点に位置づけられる。それではいよいよ、沖縄海洋博に個別的に深く立ち入って検討してみよう。海洋博を沖縄で開催する実質的・祝祭的意義はどこにあるとされ、またそこから何が産み出されてきたのだろうか。

（2）二つの祝祭性の節合：＜海＞の地政学

沖縄国際海洋博覧会協会の事業計画委員会は 1972（昭和 47）年 6 月、「海洋博の基本構想」をとりまとめた。その中で海洋博の「基本的性格」は、大きく３つに分けて認識されている。[4]

（1）海洋をテーマとする世界ではじめての国際博覧会であること

（2）沖縄で行なわれる博覧会であること

（3）本博覧会は、その成果が長期的に、しかも周辺へ発展した姿で継承される必然的

[4] 日本工業新聞社、1973、p.2～3。

性格をもつこと

＜実質性／祝祭性＞の観点からすれば、まず（3）は明らかに、経済的実質性の効果を表現している。沖縄振興開発計画とセットで立ち上げられた、復帰後の沖縄経済振興のためのビッグ・プロジェクトとしての海洋博である。実際、70 年 8 月に屋良朝苗・琉球政府行政主席が日本政府に海洋博開催を正式に要請した際、彼はこう言っていた。「海洋開発博覧会が沖縄で開催することができますと東京オリンピックや大阪万国博でもみられるように、その地域社会の開発に重要な刺激を与えるばかりでなく、社会、経済、文化の発展とともに国勢の進展に大きく寄与するものと考えます。」[5]屋良は、東京オリンピックや大阪万博が都市基盤整備や経済効果に大きく貢献したことを自覚的・再帰的にとらえ、それらをモデルとして、同じような効果を沖縄にも起こそうと考えていたことがわかる。これは、「沖縄の本土化」への動きを具体的に表す一様相であったと言えよう。

一方、これに対して（1）（2）は、祝祭的側面を多く含んでいる。（2）については、海洋博が沖縄にとって、植樹祭・国体に続く最後にして最大の日本復帰記念イベントであったことは、言うまでもない。しかし、海洋博の祝祭性は、実はそれだけにとどまらない。（1）のように、＜海洋＞をテーマ化した祝祭でもあったことに注意すべきである。そこには、どのような政治的意味がこめられていたのだろうか。つまり、＜海洋＞をテーマ化することが、いかなる意味でモニュメンタルであったのだろうか。そしてそのことが、いかにして＜沖縄＞と結びついていくのだろうか。

1970 年代は、海洋ブームの時代であった。60 年代が、人類が月に到達した「宇宙の時代」であったのに対して、70 年代は「海洋の時代」であると喧伝されていた。この背景には、世界の人口が爆発的に増大していく中で、資源問題が急速に浮き彫りになってきた時代状況と危機意識があった。例えば故ケネディ米大統領は、すでにこう言っていた。「海は地球上に残された唯一のフロンティアであり、海を知ることは、もはや単なる好奇心の問題ではなく、人類の存亡がこれにかかっている重大な問題である。」[6]海洋博の基本構想も、同様の認識を示した。「海は、人類に残された最大の課題（フロンティア）である。この海とわれわれとのかかわり合い、その未来像の探究こそ、テーマが、本博覧会の目標として表現しているところである。」[7]

これらに示されているのは、陸地も宇宙も一応の開発を成し遂げ、制覇した人類にとっての、＜最後のフロンティア＞としての海、という認識である。海は人間にとって、物理的には宇宙よりはるかに近い存在であり、活用可能な豊富な資源を含んでいながら、宇宙以上に未知の領域を多く残していると考えられていた。そのために、海洋に関する科学的研究を促進すると同時に、海洋開発を積極的に推し進めていくべきだというコンセンサスが、先進諸国の間に形成されつつあったのである。

＜海＞が、「認識すべき対象」「開発すべき対象」として、客体的にとらえられていることが明らかである。それでは、認識・開発の主体は誰か。「人類」、国家やイデオロギーの壁を超えた「人類」である。しかし実際には、この「人類」を＜代表＝表象 represent＞

[5] 沖縄県、1976、p.3、強調は多田。
[6] 日本工業新聞社、1973、p.63。
[7] 同上、p.2。

するのが、海洋先進国[8]であることに注意すべきである。すなわち、＜海＞とその開発に対して、それらの国家間に共通の利益があると考えられていた。このことが海洋博において、ナショナリズムやコマーシャリズムを超えた「国際性」や「調和」が強調される前提にもなっているのである。[9]

海洋博は、こうした＜海＞の地政学の国際的趨勢を確認し、それをより確実なものとして正当化していくために、近未来の海洋開発をイメージの領域において先取りし、空間的に具現化するイベントであったと言えよう。海洋博は、先進諸国の海洋開発をスペクタクル化する祝祭であったのである。

そして、こうした海洋開発をめぐる国際的事情に、沖縄の日本復帰がタイミング的に重なり、リンクし合ってくるのである。海洋開発記念イベントと、沖縄の日本復帰記念イベントという二つの祝祭性が、海洋博において織り重なり、節合されていく。その両者が出会った場所こそが、沖縄の＜青い海＞なのであった。この節合によって、沖縄のそこにあった海が、＜青い海＞の美的なイメージを付加され、その役割を割り当てられていくのである。それはなぜ、どのようにしてなのか。以下の検討の中で、より具体的な様相を見ていくことにしよう。

第２節　テーマと基本理念：よりソフトな＜開発＞イメージの創出

（1）テーマ「海―その望ましい未来」：誰にとって？

博覧会において、テーマと基本理念は、その博覧会の全体的な思想や方向性を最も公式的に、かつ理想化して表明するという点で、詳細な分析・検討に値する重要な資料だと言えよう。

1972（昭和 47）年 2 月の第１回テーマ委員会（委員長・茅誠司）では、「開発」という言葉をめぐって、議論が集中した。そこでの論点は、「開発」という言葉が、自然破壊、海洋汚染に直結する危険性があるため、テーマに入れる言葉としてはふさわしくないのではないか、という懸念である。これは翌３月の第２回にも引き継がれ、開発と自然破壊との関連性が問題となったが、結局そこでの結論は、「人類の未来にとって、開発のない進歩はありえない」というものであった。そこで、海洋汚染・環境破壊を伴わないような“開発の精神”を基盤にして、テーマ・基本理念を考えていこうという合意が図られたのである。[10]

こうした議論は、当時の時代状況を反映している。60 年代の高度経済成長は、日本に急速に経済的豊かさをもたらしたが、それと同時に、公害という外部不経済をももたらした。

---

[8]具体的にはアメリカ、フランス、西ドイツ、イギリス、ソ連、カナダなどに加え、日本である。日本政府の海洋開発予算はアメリカの 57 分の 1、フランス・イギリスの 4 分の 1 にとどまり、立ち遅れが明らかであった。これらの国々に追いつくことを熱望していたことも、日本の海洋博招致の一因となった。同上、p.63～106。

[9]「海洋博の基本構想」では、次のように言っている。「もはや、博覧会が赤裸々なナショナリズムや、企業の商業主義による競争の展開の場であってはならない。世界の諸国民が相互の主体性を認め合いながら、協同の意志の下に、全体として調和のとれた博覧会を構成する――そこへ参加することにより、相互の理解を深め、ひいては平和にも貢献できるような博覧会としたい。」同上、p.2。＜海＞というはたらきかけの対象の共有を前提にした、国際的協同・調和であった。博覧会においてナショナリズムの露骨なアピールが後景に退いても、政治性は依然作用している。

特に、62 年からの全国総合開発計画による大規模な公共事業を起爆剤として、GNP の倍増が図られたが、それは皮肉にも、「公害列島化」とセットで実現されていくのであった。海洋博の準備期は、「反公害」「反開発＝開発不信」の世論が高まっている時期でもあったのである。特に、海に関しても、タンカーの石油流出などの事件が頻発していたため、テーマ委員会が苦吟したのは当然のことであった。

とはいえ、開発そのものを手放すわけにもいかない。そうなるとむしろ、開発自体を変えるのでなく、＜開発＝悪＞という「開発」イメージの方を変えていくイメージ戦略が、重要となってくる。「開発」という言葉がもつマイナス・イメージを馴化して、よりソフトでクリーンなイメージに切り替えていく方向性である。結局テーマ委員会は、「海洋汚染・環境破壊を伴わないような“開発の精神”」というように、「環境保全」のイメージを「開発」に組み込み、両者をセットにしていく折衷策を採っていったのである。

こうして決定されたテーマは、「海―その望ましい未来」である。「開発」という言葉そのものを明示することは避けられたが、このテーマによって焦点をぼかされ、潜伏した形で、やはり「開発」思想が保持されたことになる。ここで、その英訳が、“The Sea WeWould Like to See”となっていることに注意すべきである。つまり、Would Like to＝Want to として考えて、これを再和訳すると、「私たちの見たい海」となる。すなわち、海の「望ましい」未来像とは、一体誰にとって「望ましい」ものなのか。We＝「われわれ」人間にとってにほかならない。このテーマをあえて深読みすれば、海を「われわれ」人間にとって見たい方向へと、認識上／実際上ともに組みかえていこう、というコロニアルな意志を表現していたことになる。

このテーマとともに下図のようなシンボルマークが作られ（制作者・永井一正）、＜白い波＞をはさむ形で＜青い空＞、＜青い海＞の図像が描かれたのである。

[10] 電通編、1976、p.38。

（2）基本理念における４つの意識類型の抽出

次に、海洋博の基本理念は、こうしたテーマの思想をどのように、より詳細に言説化しているだろうか。基本理念の言説分析[11]を行うと、大きく分けて４類型の意識が混ざり合って、一つの言説システムを織り成していることが見えてくる。①ヒューマニズム（→人間中心主義）、②＜海＞の再帰的認識とフロンティア意識、③自然環境の保全意識、④開発志向、である。

①ヒューマニズムは、万博の歴史的潮流を受け継いでいる。1851 年のロンドン万博以降、万博は１世紀近くにわたって、科学技術文明の飛躍的な進歩を賛美してきた。しかし、人類の明るい＜未来＞を約束してきたはずの科学技術文明が、実際には皮肉にも、二度に及ぶ空前の世界大戦をもたらし、核兵器の脅威を招いてしまった。第二次大戦後の万博は、こうした文明の負の側面を反省して、「人間性」の回復を盛んに唱えていくのである[12]。1958 年のブリュッセル博のテーマは「より人間的な世界へのバランスシート―科学文明とヒューマニズム」、67 年のモントリオール博のテーマは「人間とその世界」であり、ともに「人間」そのものをテーマ化していた。これらは、戦後において「人間」というカテゴリーを「再発見」するエピステーメーの中にあったと言えよう。

そしてこれを引き継いだ 70 年の大阪万博のテーマは、「人類の進歩と調和」であった。日本は東洋初の万博ということもあり、東洋思想の「和」の精神を前面に押し出して、「進歩」に「調和」をつなぎ合わせることによって、「人間性」を強調する策を採ったのであった。[13]しかも、この「人類」とは、国家間の障壁や冷戦下のイデオロギー対立を超えて、万博のもとに結集して調和しあう、普遍的な「人類」である。

75 年の沖縄海洋博は、こうした大阪万博のヒューマニズムをほぼそのまま受け継ぐ。ただし、一般博・大阪万博で表現されたヒューマニズムは、＜海＞の特別博・沖縄海洋博のフィルターをくぐることによって、より特殊的で具体的な様相をおびてくる。そして実は、それが②③④の意識類型につながってくるのである。

まず、「人類」と＜海＞との関係である。すでに述べておいたように、海洋博において＜海＞は、領土・宇宙につづく、「人類に残された最後のフロンティア」としてとらえられていた。先進諸国は、＜海＞とその開発に対して、共通の利益を共有していた。そのために海洋博では、普遍的とされる「人類」が、＜海＞の認識・開発の主体として、より具体的な様相をおびて立ち現れてくるのである。すなわち、＜海＝自然＞との関わりの中で、ヒューマニズムは人間中心主義のまなざしへと転換する。戦争や植民地支配における「人間 VS 人間」の構図を脱して、「人間性」を回復できたとしても、海洋博においては「人間 VS 自然」の新たな＜主体―客体＞の支配構図が描かれている。この構図を前提にして、＜海＞という外部の共通目標があることによって、「国際性」「調和」のヒューマニズムはいっそう強調されやすくなる。

---

[11] 言説分析、「ディスクール discours」については、フーコーの方法・視点を応用している。言説を形作るのがエピステーメー＝知のシステムである。エピステーメーのはたらきには、言説化の作用と、まなざしによる視覚化の作用があり、両者は密接に連携しあって、現実をある一定の形に構築していく。

[12] 『日本万国博事典』によれば、万博の歴史は大きく３つに分けられるという。第１期は 1851～1910 年の「機械文明開発の時代」、第２期は 1926～39 年の「科学と芸術の進歩の時代」で、第３期が第二次大戦後、1958 年以降の「人間性復活の時代」とされる（丸の内リサーチセンター、1969、p.23～24）。

[13] 「進歩と調和」の結びつきには、「人間性」や「環境との調和」を尊重しながらも、70 年代も高度成

これに対して、＜海＞は明らかに、人類＝主体が「認識すべき対象」「開発すべき対象」として、客体的にとらえられている。社会学者アンソニー・ギデンズの言う「再帰性（reflexivity）」概念を借りれば、＜海＞を対象化してとらえる再帰性が、著しく高められようとしていた。すなわち、主体の側の①ヒューマニズム＝人間中心主義とセットになる形で、客体＝対象に対して②＜海＞の再帰的認識とフロンティア意識が、意識類型として抽出できるのである。これは、国土・宇宙の開発が進められた後、最後の開発の対象となった＜海＞へのコロニアルなまなざしを含んでいる。「海と人間社会との新たな関係の構築」という問題は、実際には、＜海＝自然＞をいかに馴化して、社会システムの中に組み込んでいくかという、人間優位の発想の中で考えられていくことになる。

とはいえ、やはりすでに述べたように、露骨な生々しい＜開発＞イメージは、もはやかなり分が悪い時代状況であった。そこで、③自然環境の保全意識とセットにする形での④開発志向という複合的なイメージ戦略が、産み出されていくのである。これによって、開発志向そのものを変えないままで、＜開発＞イメージの方を変えて、よりソフトでクリーンな＜開発＞イメージを創出することができる。[14]

そして実は、沖縄海洋博におけるこの「開発」と「環境保全」の結婚は、先に見た大阪万博における「進歩」と「調和」の結婚と、機能的に等価である。つまり、大阪万博において、もはや単なる「進歩」だけでは時代遅れとなり、人間性を回復した「調和」ある「進歩」がイメージされたのと同様に、沖縄海洋博では、もはや単なる「開発」だけでは時代遅れとなったために、「自然環境の保全」を充分に意識した「開発」が、イメージされていったのである。また、大阪万博のテーマ「人類の進歩と調和」が、＜海＞の特別博のフィルターを通して特定の具体的な形をとった結果、「海洋の開発と保全」という形をなすに至った、こう考えることもできる。大阪万博と沖縄海洋博の連続性は明らかである。[15]

以上の４つの類型意識を図式化すれば、次のようになる。

	③環境保全	
①人間＝主体	⇒⇒⇒	②＜海＞＝客体
	④開発	

（3）４つの意識が巧妙にからまり合うディスクール、そして＜沖縄＞

それでは、これらの４つの意識類型は、具体的にどのように絡まり合って、基本理念の言説システムを構築しているのか、詳細に検討を加えていこう。別表では、基本理念の全文に４種類の下線を施すことによって、その言説を４つの類型意識に分類してある。また、検討の便宜上、各段落の冒頭に段落番号を付けた。

第１段落では、「地球＝運命共同体としての人類の宇宙船」という①ヒューマニズムから、「地球の３分の２が海であり、人類を含む全生命の母」という②＜海＞の再帰的認識へ

長を続けていきたいという、日本国内の志向性も含まれていた。

[14] しかもこれは、新全総の方向性とも符合するものであった。1 章 1 節（2）を参照。

[15] テーマ委員会の委員長・茅誠司（日本学術振興会会長・当時）は、大阪万博でもテーマ委員会の委員長を務めており、両者のテーマと基本理念の策定に深く関わっていた。大阪万博のテーマと基本理念が、海洋博でもモデルになっていたのは確実である。

とつながっていく。人類＝主体から＜海＞＝対象へ、という①→②の認識の流れであり、＜人類―海＞の密接な関係についての一般的な認識が語られている。

沖縄国際海洋博覧会 基本理念

[1]はてしなくひろがる宇宙空間の一角に、白雲をまとって青く輝く地球は、全人類の共同の運命をのせて飛びつづける宇宙船である。その地球は、“水惑星”の異名が示唆するように、３分の２が海でおおわれている。そして海は、すべての生命の発生のふるさとであり、わたくしたち人類をはぐくむ母である。

[2]海の幸、山の幸という古い表現がある。このことは、わたくしたちの祖先が海を資源の宝庫とし、それによってその恵みに感謝してきたことを教えている。また人類社会は、遠い地域との往来、民族の移動、文化の伝達、物資の交流によって、めざましい発展をとげてきたが、それは海洋に航行の道が開かれたからにほかならない。このように、海をはなれて人類の歴史を語ることはできないが、人口の膨張と欲望の多様化に伴い、海洋の利用と開発はますます必要となり、人類の海への依存度はいっそう深まるばかりである。そして、海にはまた多くの可能性と魅力が内蔵されている。

[3]海洋科学は、最近 100 年の間に、おどろくべき海の実態を明らかにし、その構造と変化の跡を教えてくれたが、海中にはなお多くの未知のなぞが秘められている。とくにその大部分をしめる広大な深海は、冷たい常闇と重圧にさえぎられて、ある意味では、月よりも遠い存在である。しかし、人類は海底に眠る資源にあこがれ、その開発と海洋空間の利用をめざして、飛躍的に進歩発達した科学技術を動員してこれらの障害の克服にとり組んでいる。

[4]海は陸地に比べれば、はるかに広大ではあるが、その海も有限の空間であり、かつて無尽蔵と考えられていた海洋資源にも、おのずから限度のあることを忘れてはならない。自然に育ったものを捕獲するだけでなく、みずから育ててこれを採る栽培漁業への転換の必要が提唱されているのも、このためである。なお、青い衣をまとい、光る太陽のもと、あのように輝きと美しさを誇ってきた母なる海も、ひたむきな産業の開発に伴い、その固有の浄化作用の限度をこえて漸次に汚染され、病める海にかわろうとしている。

[5]人類はいまやこの危機にめざめ、深く反省し、新たな観点から英知を結集して、清らかにして豊かな海を再現する必要に迫られている。それには、平和的な国際協力のもとに、海洋の望ましい未来を求めて、環境の保全と改善にふさわしい開発の方途を見いだすことが必要である。

[6]ともあれ、海と人間との対話をとおして、自然との協調をはかり、最大限に海洋のめぐみを享受することによって、人間の真の幸福をもたらす新しい海洋文化の樹立を指向して、この沖縄国際海洋博覧会を開くのである。海の望ましい未来像の探求は、人類の当面する共通の課題であり、それがこの博覧会のめざす目標でもある。

[7]***沖縄は、黒潮の流れにうかび、古代から民族の文化交流の中継地としての役割を果たしてきたが、さんさんたる亜熱帯圏の陽光のもと、いまなお汚れを知らないさんごの海にかこまれている。***この海を舞台に、世界の人々があい集い、この祭典をとおして理解と愛を深め、感激とよろこびをともにすることが、わたくしたちの心からの願いである。

（全文）

＿＿＿：ヒューマニズム
＿＿＿：＜海＞の再帰的認識、フロンティア意識
……：自然環境の保全意識
＿＿＿：開発志向

第２段落では、＜人類―海＞関係の歴史へと話題が移る。「海の幸、山の幸」という古い表現から連想される形で、「海＝資源の宝庫」という④開発志向の端緒が登場してくる。同時に、祖先が海の恵みに恩恵を受けてきたことが、再帰的に認識される（②）。そして、移動性・コミュニケーションの増大による人類社会の発展も（①）、海洋交通によってこそ可能になったと言う（②）。こうした海と人類の歴史をうけて、いよいよ本格的な開発志向

が姿を見せる。今日の「人口の膨張と欲望の多様化」の現状は、「海洋の利用と開発」の必要度を従来以上に増大させている、と言うのである。海が「内蔵」する可能性と魅力への「欲望」が表明される（④）。したがって第２段落は、＜人類―海＞の深い関係の歴史から現在の本格的な開発志向の表明へ、という①②→④の流れである。

第３段落では、海洋科学が登場する。その役割はまさに、＜海＞の再帰的認識である。深い海が内蔵する神秘と可能性の実態を明らかにしてきた海洋科学の、この 100 年間の功績が称賛される。しかしそれでもなお、「広大な深海」は、人間にとって暗い未知の領域であり、「月よりも遠い存在」＝＜最後のフロンティア＞として意識されている（②）。これに立ち向かうべく、海洋の資源開発・空間利用のために、「進歩発達した科学技術を動員」していくわけである（④）。第３段落は、海洋科学の認識を超えた海の神秘に対して、さらなる科学技術の発達によって開発を進めていこうという、②⇔④の相互循環的な関係を表している。

第４段落で、初めて③自然環境の保全意識が登場してくることに注意すべきである。これとは対照的に、第３段落までで、②＜海＞の再帰的認識と④開発志向はほぼ語り尽くされている。②と④の核心を表明した後、ここから③自然環境の保全意識を明確にすることによって②④の露骨さを中和し、バランスを保っておいて、第６段落から最後には①ヒューマニズムに回帰していく流れは、ひとつの予定調和的な物語性を表していて興味深い。

第４段落ではまず、広大な海も「有限の空間」であることの自覚を促す。そして、その有限意識は、「とる漁業から育てる漁業へ」の転換が唱えられる現状についてもアピールする。[16]ここで、「青い衣をまとい、光る太陽のもと、あのように輝きと美しさを誇ってきた母なる海」が、ノスタルジーをもって想起されている。しかも、ここでの＜海＞は、第３段落までの「資源の宝庫＝開発の対象」として認識された海とは全く対照的に、＜海＞の視覚的・美的な側面を強調されている。こうした＜海＞のロマン主義は、どのようなコンテクストの中で浮かび上がり、いかなる機能を果たすのだろうか。

これとセットになるのが、「ひたむきな産業の開発」＝悪という、やはりここまでとは対照的なイメージである。開発がもたらした「汚染」「病める海」の現状認識は、ここまでの＜海＞へのフロンティア意識や開発志向と、全く矛盾するものであるように思える。そうした自己矛盾的な「開発＝悪」のイメージを補完するのが、先の美的な＜海＞のロマン主義である。「あのように輝きと美しさを誇ってきた母なる海」と、過去形で語られていることに注意すべきである。すなわち、このよき過去へのノスタルジーが、「汚染」「病める海」の現状に対するオールタナティブ・イメージとしての機能を発揮し、逆に未来のモデル、すなわち海洋開発の「望ましい未来」のモデルとして、機能してくるのである。第４段落では、自然環境の保全意識が初めて、全面的に押し出された。③が②④に対して自己矛盾を起こさせ、根本的な反省を迫る段階である。

これをうけて第５段落も、自然環境の保全意識が続く。人類は海洋開発をめぐって自己矛盾を起こしているからこそ、「深く反省」すべきだということになる。「英知を結集」して、「清らかにして豊かな海を再現」することが課題となる。この反省の身ぶりが、「環境

[16]「とる漁業から育てる漁業へ」の転換は、確かに自然環境を保全しようとする意識の表れではあるが、現象としては「漁業の工業化」であり、海をコロニー化していく実践として、「自然の人工的所有」の一環であると言えよう。

の保全と改善」（③）と、それに「ふさわしい開発の方途」（④）との結婚を産み出すのである。第５段落は、環境保全意識と結婚した開発志向が、過去の反省をふまえて新たな「望ましい未来」を求める、③→④のはたらきかけ、③と④の結婚段階である。

第６段落は総括の段階に入る。すでにふれておいたように、ここからは①ヒューマニズムに回帰してくる。「海と人間との対話をとおして、自然との協調をはかり、最大限に海洋のめぐみを享受することによって、人間の真の幸福をもたらす新しい海洋文化の樹立を指向して」という箇所は、「対話」「協調」「人間の真の幸福」「海洋文化の樹立」から、全体的には①ヒューマニズムを示している。ただし、②③④をすべて含み込み、綜合してもいる。「海と人間との対話」は、①と②、主体側の人間と客体側の海とのコミュニケーションである。「自然との協調」は、①と③の結合、人間と自然環境との協調である。これらの媒介によって、「最大限に海洋のめぐみを享受する」④の開発が、よりソフトなイメージをもって可能となる。こうして結局、人間は「真の幸福」を手に入れ、新しい海洋の文化を樹立することができる（①）。

ここへ来てついに、「沖縄国際海洋博覧会」が登場する。４種類の意識が一体となって、「海の望ましい未来」が指向される祝祭の場が、この沖縄国際海洋博覧会なのである。第６段落は、②③④の意識を綜合した①ヒューマニズムのもとに、沖縄国際海洋博覧会の開催を宣言する箇所である。

そして、第７段落において切り札のごとく、最後に＜沖縄＞が登場する。前段落から、①→海洋博→＜沖縄＞、という流れである。

「沖縄は、黒潮の流れにうかび、古代から民族の文化交流の中継地としての役割を果たしてきたが、さんさんたる亜熱帯圏の陽光のもと、いまなお汚れを知らないさんごの海にかこまれている。」

この箇所は、海洋博において＜沖縄＞イメージが果たした機能を考える上で、非常に重要である。「黒潮」「亜熱帯圏」「陽光」「さんご」といった沖縄独特の＜自然・気候＞のイメージと、「古代から民族の文化交流の中継地」といった沖縄独特の＜歴史・文化＞のイメージは、②③④をとりまとめた①ヒューマニズムを、可視的に表現するシンボルとなりうるものである。

「いまなお汚れを知らないさんごの海にかこまれている」自然的・地理的環境は、＜海の望ましい未来＞をイメージするためのモデルとなりうる。第４段落では過去形で語られた、すでに失われたはずの＜青い海＞が、沖縄には実際に、「いまなお汚れを知らない」状態で眼前に広がっているのである。だから、沖縄の「さんごの海」は、失われた過去へのノスタルジーを想起させる装置となるのだが、それが反転して、未来のモデルにもなる。先述したような、「汚染」「病める海」の現状に対するオールタナティブ・イメージ、そして＜海の望ましい未来＞のモデルとしての機能が、沖縄の海に割り当てられていくのである。沖縄の海を通して、②＜海＞の再帰的認識と③自然環境の保全意識がさらに深まっていく。さらにその上、④開発志向に過去の反省を迫り、③と調和した未来の開発のあり方を模索させる。

しかしながら、＜海＞の視覚的・美的な側面を強調する＜海＞のロマン主義は、「海洋

開発＝悪」のイメージに対置されつつも、それを補完する機能をもつものでもあった。特に、一般的には失われて過去のものとなったはずの「母なる海」の輝きと美しさが、ここ沖縄では「いまなお汚れを知らない」まま残っている。この一般的な過去と沖縄の現在との時間的落差が、海洋開発への意志にチャンスを与える。「汚れを知らない」沖縄の美しく輝く＜青い海＞においてこそ、海洋汚染の過去を反省するとともに忘却して、新たな「望ましい」開発を、海洋博という祝祭の場で高らかに宣言することができるのである。

沖縄独特の＜自然・気候＞のイメージが②③④に直接対応したのに対して、「古代から民族の文化交流の中継地」といった沖縄独特の＜歴史・文化＞のイメージは、沖縄が異文化間のコミュニケーションの結節点となってきたことをメッセージとする点で、①ヒューマニズムに対応している。そして結局＜沖縄＞は、その＜自然・気候＞と＜歴史・文化＞を一体化したトータルな＜沖縄＞としてイメージされるため、この＜沖縄＞イメージに表現される①ヒューマニズムも、②③④と一体のものとして、それらを綜合することになるのである。最後の文では、「この海を舞台に」、つまり沖縄の海を舞台として、「世界の人々があい集い」「理解と愛を深め」「感激とよろこびをともにする」といったヒューマニズムが目白押しである。海洋博において、こうしたヒューマニズムの実現が、「心からの願い」とされるのである。

第７段落は、②③④を綜合した①ヒューマニズムを、＜沖縄＞イメージがビジュアル的に表現して、その＜海＞を舞台装置として、ヒューマニズムがさらに強化された形で表明されるという箇所である。第６段落からの流れを見るなら、①→海洋博→＜沖縄＞→①となり、海洋博と＜沖縄＞を通して、ヒューマニズムが再帰的に強化されていることがわかる。ただし、その中で＜沖縄＞イメージは、②③④の意識も同時に強化していたのである。

以上のように、海洋博の基本理念において、４つの意識類型は相互に複雑に絡まり合って、ひとつの言説システムを作り上げ、「ソフトな海洋開発」イメージを表現するストーリーを織り成していた。その中で最後に登場した＜沖縄＞は、このストーリーの一部を視覚的・美的に表現することによって、これらの４種類の意識を再帰的に強化する、一種の媒体＝メディアとしての役割を果たしていたのである。

本章で詳細に分析・検討してきたテーマと基本理念は、海洋博の全体的な思想や方向性を最も公式的に、かつ理想化して表明する言説であった。それでは、より実際的には、そうした思想･方向性は海洋博の中でどのように運用され、具現化されていったのだろうか。次章では、会場用地選定や会場展示のあり方を具体的に検討する中で、これを明らかにしていきたい。特に、以上の基本理念の検討の最後に、美的な＜沖縄＞イメージが登場し、４類型の意識をビジュアル的に具現化・強化していたことを見てきたわけだが、次章ではより具体的に詳しく、＜沖縄＞とその＜青い海＞のイメージが、いかに会場に空間化されていくのか、またそのことの意味などに焦点を当てて、検討していくことにしたい。